

### 第3節 慶長度本殿遺構

寛文造成土を掘り下げた結果、現地表下約60cmで遺構を検出している。

#### 遺構の概要

検出された遺構は、礎石建物の柱跡3箇所とそれを囲む方形の基壇跡であると考えられる。検出面は、基壇の基底部を確認した程度であり、寛文度造営時に大きく削平をうけていると考えられる。

基壇と考えられる石列は、調査区内において東西で断続的に10m、また東西に6m確認している。

石列は柱跡に接するように配されており、本殿を囲む基壇と考えられる。基壇と、東西に並ぶ柱跡は接していることから、建物前面にあたる妻側の柱3箇所に相当すると考えられる。

3基の柱穴は、東西にならび、柱跡の間隔は、2.5m、中心間の距離は5.1mである。

また、基壇の西側には、雨落溝とみられる溝跡1基を確認している。確認できたのは、調査区の西側で、南北長12m分である。上端幅最大1.5mであった。

また、平成11年度には、本殿遺構の南側からやや保存状況の悪い小規模な礎石が確認されている（第38図）。平面位置関係からみて、これらは、慶長本殿遺構に伴う階段跡であると考えられる。

実際に遺構を掘り下げて遺構の状態を確認したのは、2箇所の柱跡のみである。

本殿主軸は、1号柱跡・2号柱跡・4号柱跡の中心をとると、方位座標軸に対して、反時計回りに3°振れており、N-3°-Wとなる。

#### 1号柱跡（第62図・写真71）

##### 規模

平面形2.5×2.2mの不整規円形で、深さ65cmを測る。柱跡内には、拳大から人頭大の角礎が密に充填されており、基壇の石列と南側で接する。

#### 覆土

遺構の上面には、赤褐色の寛文造成土が堆積しており、寛文度造成土直下から検出した遺構といえよう。

#### 性格

寛文度造営以前の柱跡であると考えられる。柱穴には、礎が隙間なく充填してあり、建物礎石の沈下を防ぐための下部構造と考えられる。大きく削平されているため礎石自体は出土していない。

#### 2号柱跡（第63図・写真73～74）

##### 規模

平面形2.2×2.2mの円形で、深さ40cmを測る。なお、遺構保存のために完掘はしていない。上層には、礎が隙間なく充填されており、基壇の石列と南側で接する。

#### 覆土

上層には寛文造成土が遺構検出面の直上まで堆積している。

#### 性格

1号柱跡と同様に柱跡であると考えられる。上面は削平されており、礎石などは出土していない。

#### 3号柱跡

##### 規模・性格

調査区東側で遺構の一部を確認しているが、遺構の大部分が調査区外であるため、規模・性格などについては不明である。

検出部分では、礎が隙間なく充填されている状況が観察できることから遺構が比較的良好に残存していることが予想される。

#### 4号柱跡

##### 規模・性格

調査区北側で遺構の一部を確認しているが、遺構の大部分が後世の擾乱により壊されており遺構の残存状況は悪い。

### 出土遺物

遺構面から遺物は出土していない。

## まとめ

遺構検出面からは、遺物が出土していないため、遺物から時期を確定することは困難である。

慶長度本殿とした根拠は次の点が挙げられる。  
①遺構の覆土は、寛文度（1667年遷宮）時とみられる17世紀前半の遺物を含んだ大規模な造成土に覆われていたこと。②建物が礎石立てになっていることである。

古来据立柱であった出雲大社本殿が礎石立てになるのは、慶長度以降であることが、北島国造家の上官であった佐草自清が寛文度造営について記録した『御造営日記』など複数の史料から知られている。

慶長度の本殿については、藤澤彰氏により文献史料と絵図に基づいた詳細な復元研究が示されている。<sup>⑩</sup> 本殿平面規模については、『慶長造営御宮立間尺〈佐草〉自清控』（山雲大社蔵）に、「一、本社うちのり五間四方、但し京間二五寸」とあることから、一間の長さを京間（一間=6尺5寸）に5寸足したもの、つまり7尺と解釈して、35尺（10.6m）四方の規模が想定されている。柱間隔は、この半分の5.3mとなる。これに対して一間の長さを京間（6尺5寸）とした福本健司氏は、五間四方を32尺5寸（9.85m）四方と解釈している。この場合、柱間隔は4.9mほどとなる。<sup>⑪</sup>

出土した遺構では礎石が除去されており、本来の柱位置を正確に確定できるものではないが、仮に柱跡の中心を柱位置とみた場合は柱の心々距離で5.1mと復元される。これは上記の両復元案のちょうど中間値となり、微妙な位置差でどちらとも解釈可能なようである。ここで、階段跡とみられる礎石（と礎石抜き取り坑）の間隔を手がかりにすると、仮に階段幅が殿舎の柱間隔と同じとした場合は柱間隔5.3mとした藤

澤氏の案がより近い。すなわち一間を7尺として平面規模を35尺（10.6m）四方に復元するものである。

慶長度本殿は豊臣秀頼による造営で、神仏習合の影響を濃く受けた建築型式をとる。先行研究で指摘されているとおり、出組の斗栱を採用しているのもそうした特徴のひとつとされる。<sup>⑫</sup>

出組をもちいた場合、妻側の梁が組物によって一手先外に張り出す。このため現在の木殿がそうであり、かつ大社造の特徴とされる宇豆柱が棟持柱として外側に突出する構造をとるのは困難であることが指摘されている。<sup>⑬</sup>

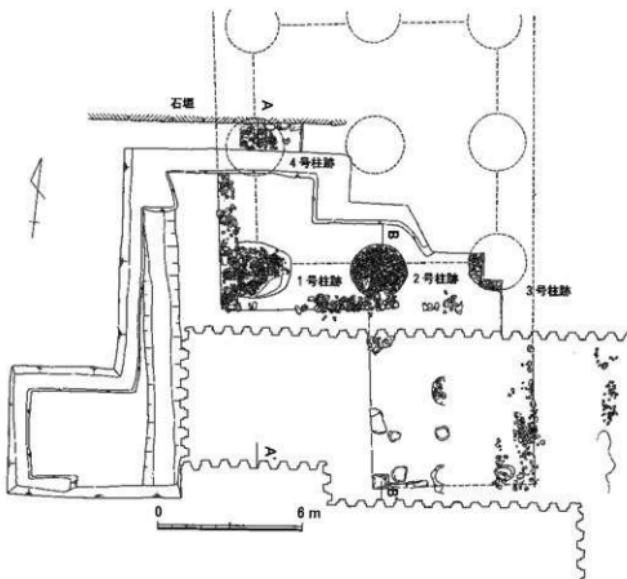
発掘調査では出土した柱跡は妻側の柱通りが一直線にならび、建築史研究での予想を裏付けむかたちで、宇豆柱の突出がないことが認められた。

### 〔参考文献〕

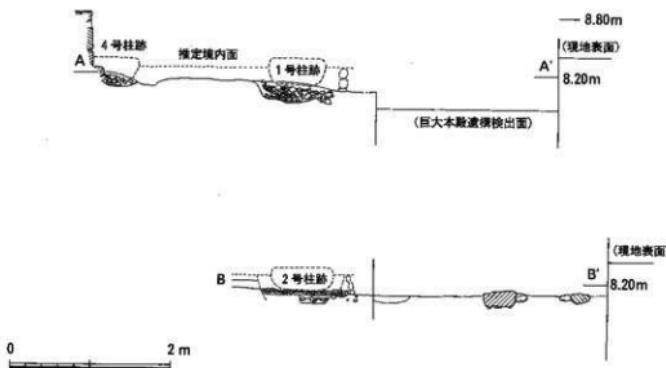
1. 藤澤彰 1998「出雲大社の宝治・慶長・寛文度造営頃の境内建築の復元について」『古代文化研究』第6号 島根県古代文化センター
2. 福本健司 1996「出雲大社慶長度本殿の復元考察―出雲大社本殿の復元研究（其二）―」『日本建築学会大会学術講演梗概集（近畿）建築歴史・意匠』
3. 川上賀 1987「出雲大社の建築」『出雲の神々』 上田正昭編 筑摩書房、三浦正幸 1996「出雲大社慶長度本殿の復元史料～出雲大社本殿の復元（其一）～」『日本建築学会学術講演梗概集（近畿）建築歴史・意匠』
4. 藤澤前掲文献、三浦正幸 1998「出雲大社本殿」『日本建築史基礎資料集成』中央公論美術出版
5. 松尾充昌 2002「①出雲大社境内遺跡」「大社町史」史料編（民俗・考古資料）大社町



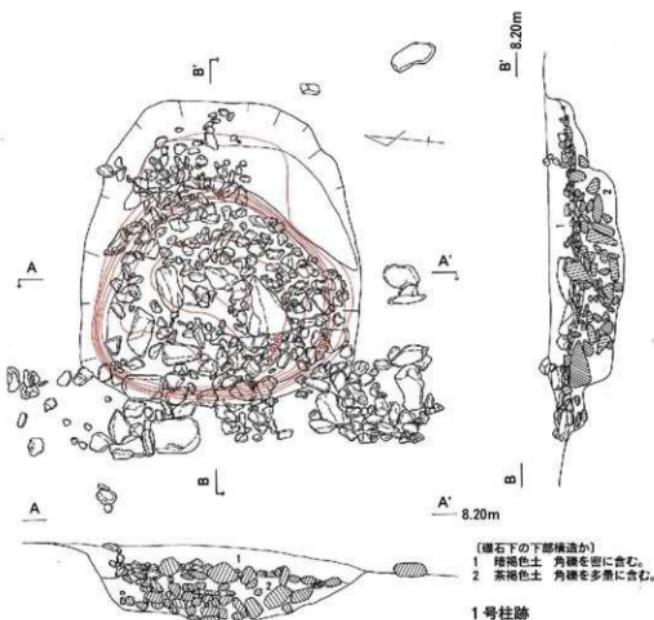
第59図 八足門前調査区 幢長度遺構面 平面図 (S=1/100)



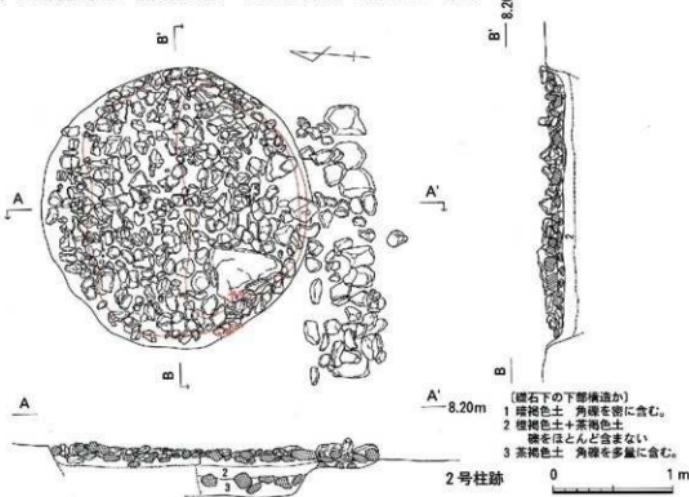
第60図 八足門前調査区 慶長度本殿位置想定図 ( $S=1/200$ )



第61図 八足門前調査区 慶長度造構面見通し図 ( $S=1/150$ )



第62図 八足門前調査区 慶長度遺構面 1号柱跡平面図・土層図 ( $S = 1/40$ )



第63図 八足門前調査区 慶長度遺構面 2号柱跡平面図・土層図 ( $S = 1/40$ )



写真70 八足門前調査区 慶長度遺構面(1)（東から）



写真71 八足門前調査区 慶長度遺構面(2)（手前が1号柱跡：南西から）



写真72 八足門前調査区 1号柱跡半截状況（北東から）

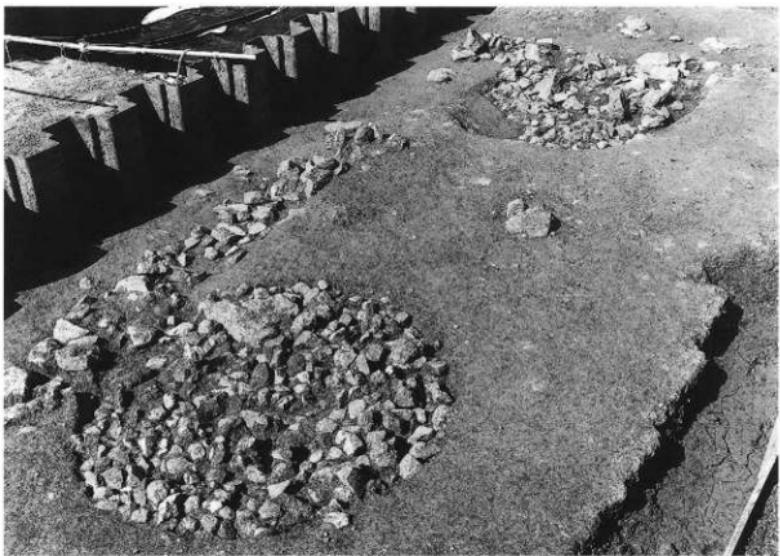


写真73 八足門前調査区 慶長度遺構面(3)（手前が2号柱跡：北東から）



写真74 八足門前調査区 2号柱跡半截状況（南西から）

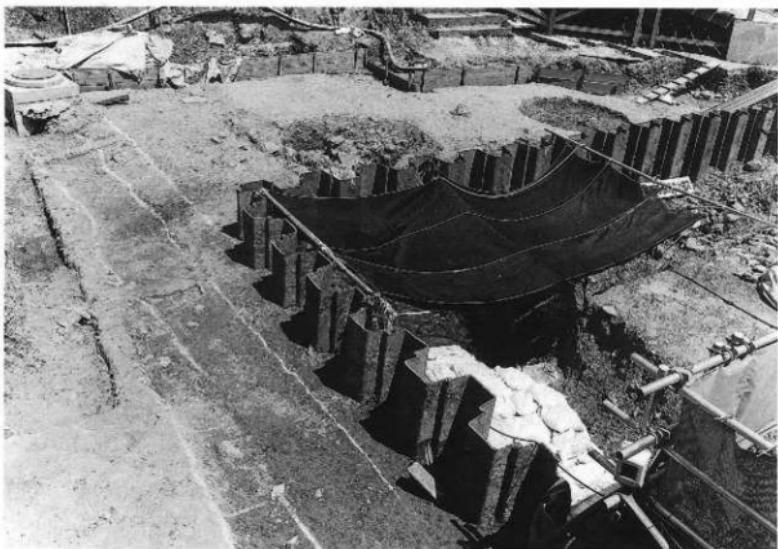


写真75 八足門前調査区 慶長度遺構面(4)（西側溝の状況）

## 第6章

### 八足門前の調査②

(大型本殿遺構)

## 第6章 八足門前の調査②（大型本殿遺構）

### 第1節 柱の位置・名称について

平成12年（2000）4月、八足門前調査区北西隅から3本の柱材を結束させた巨大柱が出土した。この柱が、巨大本殿を構成する柱のうちの1ヶ所であることは、柱の規模からも想定された。ただし、本殿のどの柱にあたるか確定するためには、その後の調査区拡張の調査結果を待たなければならなかった。

当初は、以下の2点から本殿前面中央の大社造りで「宇豆柱」と呼ばれる柱であると考えた。

①八足門前調査区と南側で接する拝殿地下調査区（昭和32・33年調査）では、巨大本殿遺構に関係する遺構は確認されていない。（第6図）よって巨大柱穴遺構がこれ以上南側に存在しない。

②出土した柱の東方にも同様な礎集中遺構があり、その位置関係から出土した柱が建物の外側に突出する棟持柱に相当すると考えられるこど。

以上から「宇豆柱」に相当すると推定された。（写真76～79）

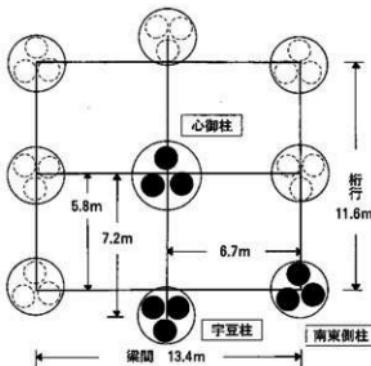
さらに、平成12年7月には、調査区を北側と一部西側に拡張した。その結果、宇豆柱の北側・東側からそれぞれ宇豆柱と同様の柱材3本を1つに束ねた構造をもつ柱が2ヶ所確認された。大社造の平面的特徴、すなわち二間×二間のほぼ正方形プランで切妻妻入、前後の棟持柱が突出するなどの点からみて、さらに入土した柱は建物の中心に位置する「心御柱」と南東角に位置する「南東側柱」に相当するとされる。

遺構が検出された時点から、それぞれの柱穴遺構の名称を「宇豆柱」「心御柱」「南東側柱」という名称を使用している。本報告書でも便宜的に調査時の名称を継続して使用する。

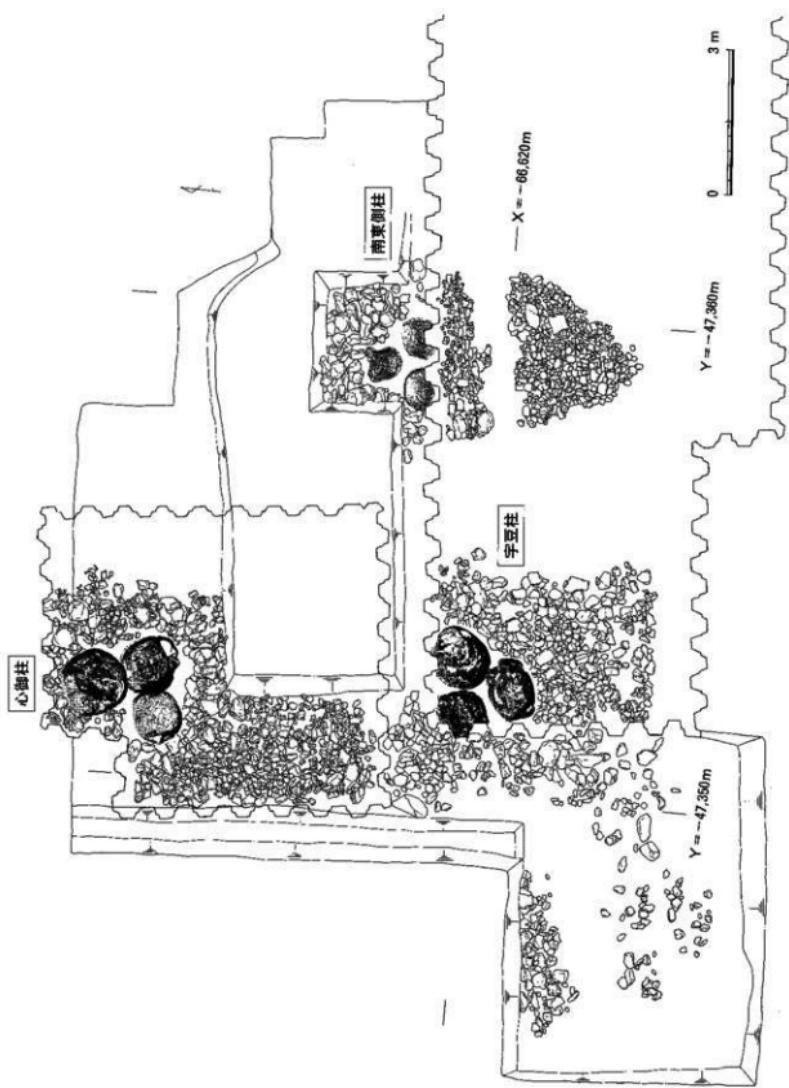
### 第2節 建物の規模・方位について

出雲大社本殿を代表例とする大社造りと呼ばれる神社建築は、9ヶ所に柱を田の字型に配置する2間×2間の総柱切妻妻入りの建物である。今回、出土した柱3箇所から本殿規模を想定すると、宇豆柱と心御柱の距離が心々距離で7.2m、宇豆柱と南東側柱が6.7mである。この距離が直ちに本殿床面の規模と結びつけることはできないが、柱の出土位置から本殿規模を図上で復元すると梁間（南東側柱と南西側柱の心々距離）が13.4m、桁行（南東側柱と南西側柱の心々距離）が11.6mとなる。（第64図）

本殿主軸は、心御柱と宇豆柱の中心点をとると、方位座標軸に対して、反時計回りに4°振れており、N-4°-Wとなる。現在の本殿は、N-6°-Wであり、現本殿より時計回りに2°振っている。



第64図 柱跡間の距離



第65図 八足門前調査区 巨大本殿遺構検出面平面図 ( $S = 1/100$ )



写真76 八足門前調査区  
礫集中造構検出状況（1）  
（南西から）



写真77 八足門前調査区 磋集中造構検出状況（2）  
（南東から）



写真78 八足門前調査区 碓集中造構検出状況（3）（北東から）



写真79 八足門前調査区 碓集中造構検出状況（4）（南から）



写真80 八足門前調査区 大型本殿遺構検出状況（南から）



写真81 八足門前調査区 大型本殿遺構検出状況（北西から）

### 第3節 宇豆柱の調査

#### 1. 柱穴の検出面

柱穴が検出されたのは、現地表下約1.3m、標高7.3m前後の地点である。

宇豆柱柱穴の被覆土は、不明瞭なところがあるが、調査区拡張部分の御守所前土層観察によれば、建物廃絶直後に堆積した土が26cmから30cmの厚みをもって水平堆積していることが確認された。この土層が柱上面全体を被覆していたと考えると、この本殿が立っていた当時の地表面は、検出面よりそれほど高かったとは考えにくい。

また、廃絶直後に堆積した土は、均質でよくしまってはいるが、漆喰破片など基壇を形成していたと考えられる痕跡は確認していない。

#### 2. 柱穴の構造

##### 規模

検出した柱穴の規模は、平面形で南北間4.4m、東西間最大幅3.6mを測り、南側にむかってすばまるかたちを呈している。規模は、北側部分が矢板に区切られており、不明な部分があるが平面が南北約8.5m、東西幅約6mの南にとがった倒卵形を想定している。

柱は、北側に2本（北東柱材・北西柱材）南側に1本（南柱材）の3本の柱材が互いに隙間なく接しており、3本を結束して1本の巨大な柱としている。

柱を結束した大きさは、推定最大径2.7mとなる。柱が巨大であるが、基本的に掘立柱の構造で、基底部に礎石状の石などはない。

柱床面は、南から北に約20°の傾斜で下がるスロープ状の構造である。

##### 礎の充填

柱穴は柱立ての後、多数の石により隙間なく充填されている。石は角礫から亜円礫が用いられている。石の重量を計測した結果、平均4.5

kg、最大の石は139kgであった。



写真82 八足門前調査区 宇豆柱 柱穴出土の礎

柱穴内が土砂ではなく、石で埋める工法は特異であるが、境内地の湧水レベルは、現在標高7m前後であり、柱穴の底部が標高5.8mであることを考えると、湧水はかなり高い。柱穴構築時も湧水があったことが予想される。そのような湧水に対応するために石を用いたと考えられる。

##### 柱上面

柱材の直上には、青灰色の粘質土が堆積していた。これは、柱上面部分が、常時水位面よりも上にあったため、腐食し、そのかわりにきめの細かい粘質土が置換したものと考えられる。その上面には、厚さ20cm前後の炭化物を多量に含む焼土層が確認された。焼土が出土しているのは、柱の上面の範囲に限られる。

焼土の性格については、建物廃絶時に何らかの火を用いる行為があったようである。後述するが、検出した一連の巨大本殿遺構は、鎌倉時代、宝治2年（1248）に造営された本殿である可能性が最も高い。その後、文永7年（1270）年に杵築社で火事があった記録（『帝王編年記』）があり、火災が原因であったとも考えられる。また、焼土が柱の上面のみにみられるることを考えれば、何らかの儀礼行為があった可能性も残される。

### 赤色顔料

南柱材の南側面中ほどにわずかに赤色の顔料が付着している箇所が認められた。また、柱周辺の青灰色粘質土中からも粒状となって出土している。

顔料は地表に表れる部分の柱に塗彩されてい可能性を示している。また、柱穴から出土した赤色顔料は、上部を赤色顔料で塗彩作業をしている際に滴下したものであると考えられる。赤色顔料は、この他柱上面の焼土中から出土した鉄製品にも付着しており、本殿の地上部分で使用されていたようである。

なお、東京文化財研究所朽津信明氏の分析によりこの顔料成分が酸化鉄に由来するベンガラであることが判明している（第19章参照）。



写真83 八足門前調査区 宇豆柱付着の赤色顔料

### 柱穴下部

柱穴が矢板で区切られているため、断片的な情報しか得られていないが、柱の掘り方底面からは、最大40cmの厚さで土が堆積している。この土が掘り方構築時に堆積した土か、もしくは同一の柱穴を再利用したために土が堆積したものか、現段階では言及することは困難である。

柱の直下には、鉄製品の鋒が2点土師質土器の柱状高台付环2点が出土している。

鋒は、偶然混入したとは考えにくく、柱立て直前に柄を抜いた状態で意図的に埋置されたものと考えられる。

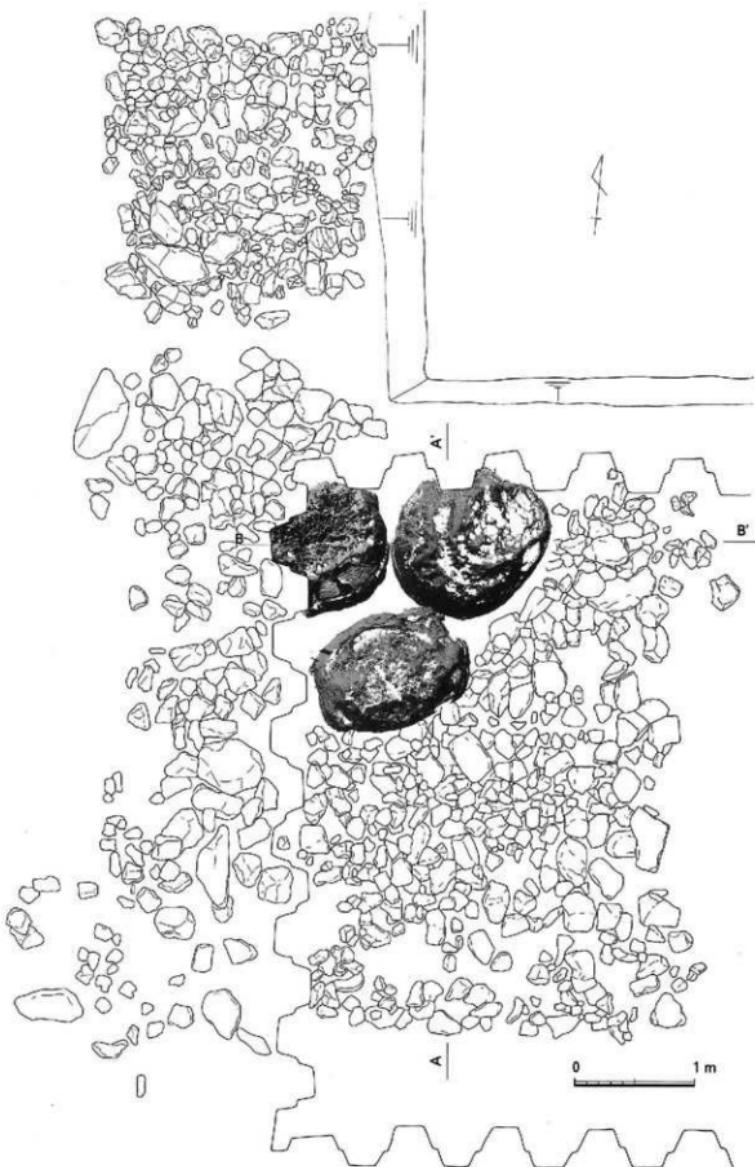
また、柱の侧面・底面を調整した際の木片が多量に出土しているほか、北側には、16本の丸棒状の杭材が出土している。杭の間隔は約10cm間隔で9本・5本・2本とまとまっている。樹種分析（第18章参照）によれば、モミ属・サカキ・クロモジ属・モクレン属類似・クスノキ属・杉と多種の木材が使用されており、杭材として樹種を選択したとは考えにくい。矢板の間近の場所から出土しており、杭列がさらに北側へと続くのか不明であり、使用目的ははっきりとわからない。可能性としては、柱立てを行なう際の目印、もしくは柱の不動沈下を防ぐ目的を想定しておく。

### 柱の立ち方

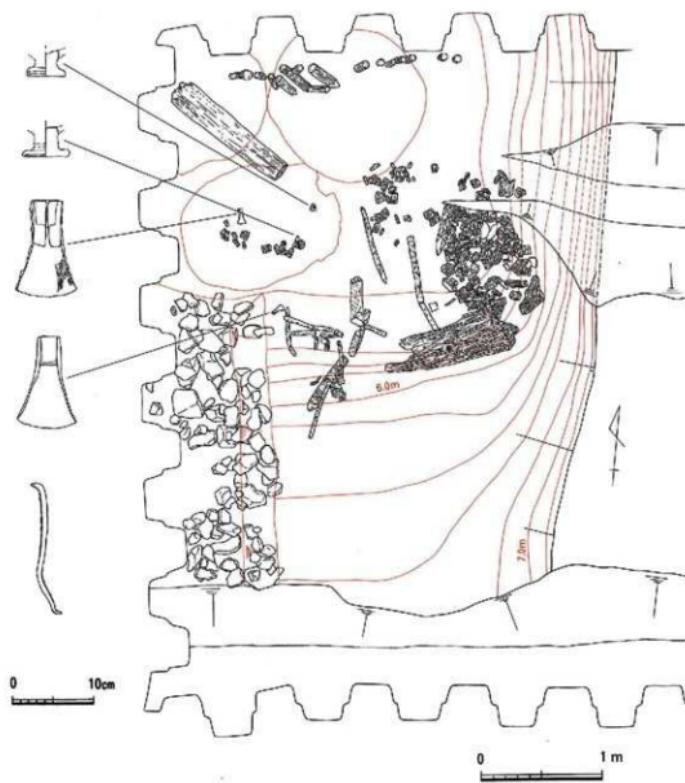
柱の一部が矢板に区切られているため、柱が現位置を保っているのか不明であるが、出土した状況では、大きく傾いた様子ではなく、転倒したと考えられる証拠はない。

柱の立て方は、柱穴が南から北に緩やかに下るスロープをもつことから、南方から搬入して柱立てを行なったことが想定される。

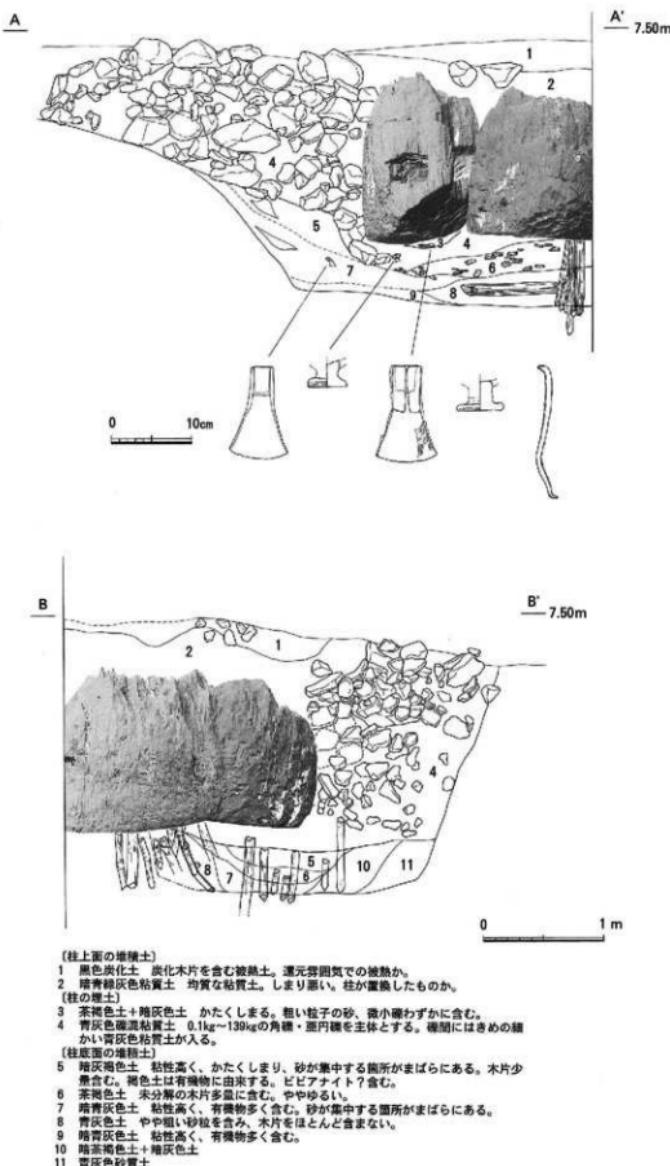
また、3本の柱材は、それぞれ別に立てた後に束ねたようであり、南柱材の北側底面は約40°斜め方向に削られている。これは、先に柱立てを行なった北西・北東柱材と南柱材が干渉しないように削り落としたと考えられる。その結果、柱の直下には、木片が多量に出土したと考えられる。そのほか、南柱材と接する北西・北東柱材の側面には、摩擦によってできたと思われる圧痕や、ささくれがみられること、柱の埋まっていた深さが異なることなどから、3本を結束した状態から柱立てを行なったとは考えにくい。



第66図 八足門前調査区 宇豆柱 出土状況平面図 (S=1/40)



第67図 八足門前調査区 宇豆柱 底面平面図 ( $S = 1/40$ )



第68図 八足門前調査区 宇豆柱 土層図 (S=1/40)



写真84 八足門前調査区 宇豆柱 出土状況  
(南東から：柱材1本目を確認した状況)



写真85 八足門前調査区 宇豆柱 出土状況  
(南東から：柱材3本目が出土した状況)



写真86 八足門前調査区 宇豆柱 出土状況（東から：柱材3本目が出土した状況）



写真87 八足門前調査区 宇豆柱 出土状況（上面から：柱材3本目が出土した状況）

写真88 八足門前調査区 宇豆柱 出土状況  
(東から)



写真89 八足門前調査区 宇豆柱 南柱材 (東から)



写真90 八足門前調査区 宇豆柱 底面木片出土状況  
(北西から)



写真91 八足門前調査区 宇豆柱  
取上げ後の底面（南東から）



写真92 八足門前調査区 宇豆柱  
底面出土鉄製品（新）



写真93 八足門前調査区 宇豆柱  
底面出土杭材

### 3. 柱の構造

#### 北東柱材 (第69図・写真94~98)

樹種は杉材である。直径は、最大径が132cmであり、年輪は121本確認できる。残存長は、122cmであり、上端の標高値は6.97m、下端の標高値は5.75mである。

柱の上端は、常時水位面よりも上に位置していたようであり、腐食している。よって柱上面が人為的に切られたのか、転倒などによって折れたのかは、柱の観察からは不明である。

柱の側面には、明確なえつりの穴（繩などを通し運搬に使用したと考えられる穴）は確認できないが、側面の下端から上下68cmの幅に無数の加工痕が確認できる。また底面のエッジを加工したと考えられる多数の加工痕がみられる。

#### 北西柱材 (第70図・写真99~103)

樹種は杉材である。直径は、矢板によって区切られており最大径は不明であり、調査時に確認できた直径は110cmである。年輪は144本確認できる。残存長は、97cmであり、上端の標高値は7.05m、下端の標高値は6.08mである。

柱の上端は、常時水位面よりも上に位置していたようであり、腐食している。

柱の側面には、えつりの穴があけられていた

ようであり、柱東側面下端から48cmの場所に上下幅約30cmほど穴が貫通している。また、西側面下端から約80cmの場所にも穴があけられていたと考えられるくぼみが確認できる。上端が腐食しているため、はっきりとわからないが、これもえつり穴の一部であろうか。

また、側面の明確な加工痕は確認できないが、底面のエッジを加工したと考えられる多数の加工痕が確認できる。

#### 南柱材 (第71図・写真104~110)

樹種は杉材である。直径は135cmである。年輪は195本確認できる。残存長は、143cmであり、上端の標高値は7.05m、下端の標高値は5.62mである。

柱の上端は、常時水位面よりも上に位置していたようであり、腐食している。

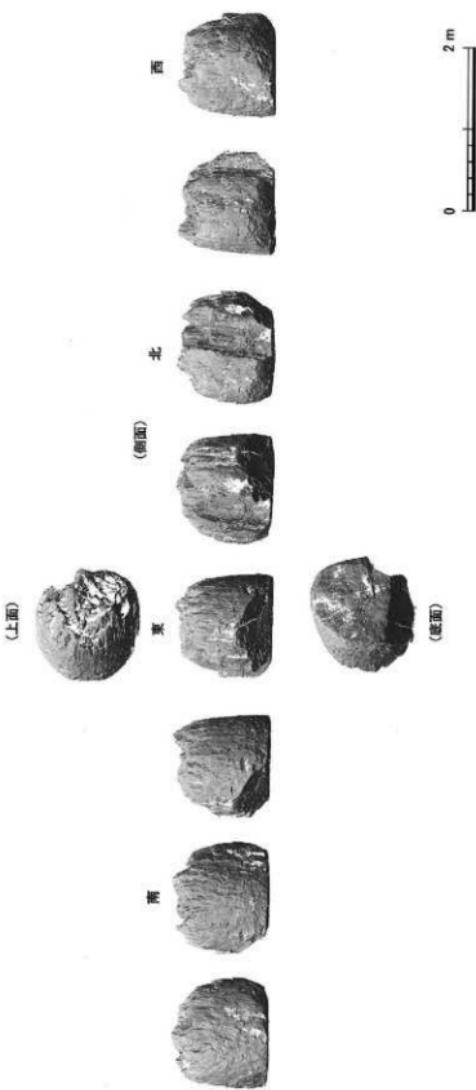
柱の側面には、えつりの穴があけられていたようであり、柱下端から約45cmの場所に上下幅約28cmほど穴が東側と西側の2ヶ所の対称的にあけられている。

また、側面の明確な加工痕は確認できないが、底面のエッジを加工したと考えられる多数の加工痕が確認できる。特に柱底面の北側の北西柱材・北東柱材と接する場所はエッジを40°斜めに削かれている。

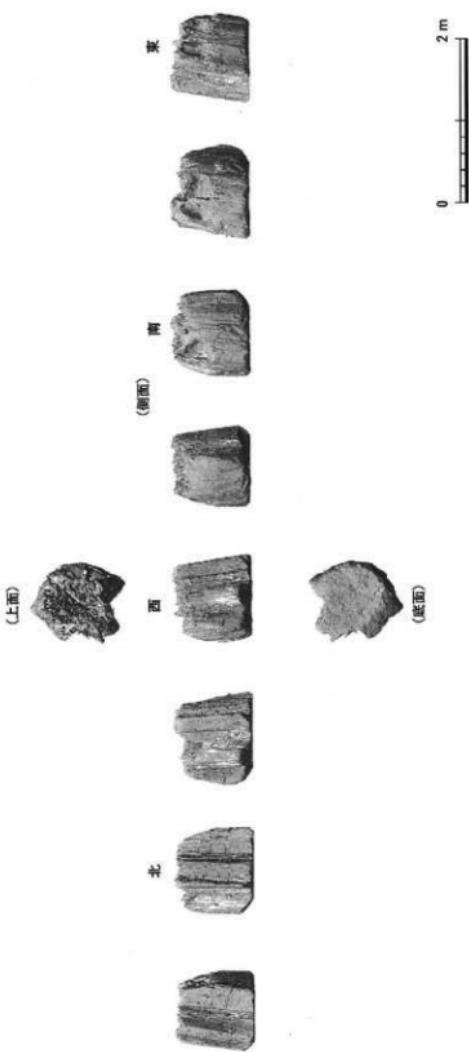
表15 八足門前調査区 宇豆柱基本データ

		樹種	直徑 (m)	年輪 (本)	残存長 (m)	上端 (標高値:m)	下端 (標高値:m)	備考
宇豆柱	北東柱材	杉	1.32	121	1.22	6.97	5.75	
宇豆柱	北西柱材	杉	1.1	144	0.97	7.05	6.08	矢板に切られて おり最大径不明。
宇豆柱	南柱材	杉	1.35	195	1.43	7.05	5.62	

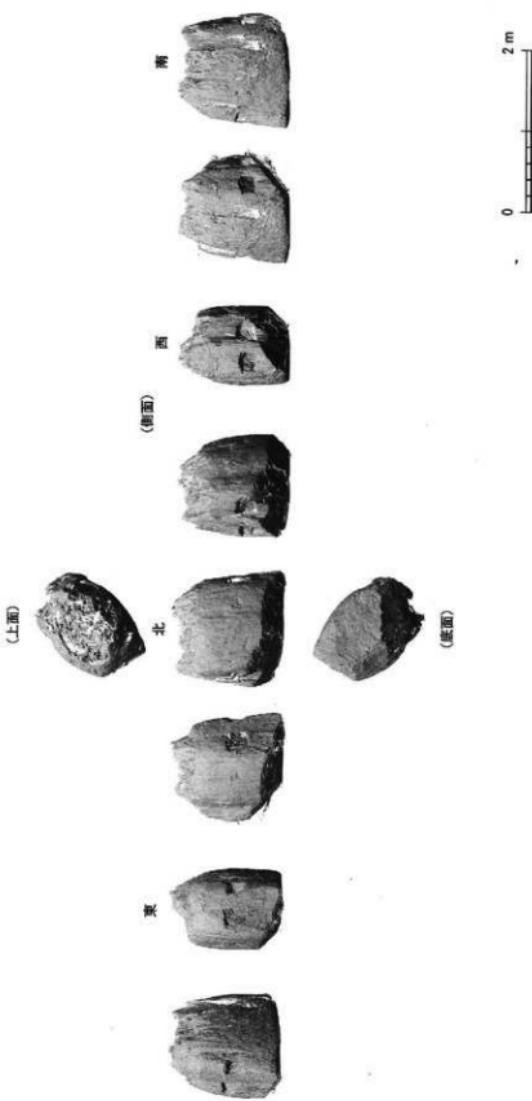
\*樹種については、奈良文化財研究所光谷拓実氏の観察による。



第69図 八足門前調査区 宇豆柱（北東柱材） 3次元計測図 ( $S = 1/60$ )



第70図 八足門前調査区 宇豆柱 (北西柱材) 3次元計測図 (S-1/60)



第71図 八足門前調査区 宇豆柱（脚柱材） 3次元計測図（S-1/60）



写真94 八足門前調査区 宇豆柱 北東柱材  
(側面1)



写真95 八足門前調査区 宇豆柱 北東柱材  
(側面2)

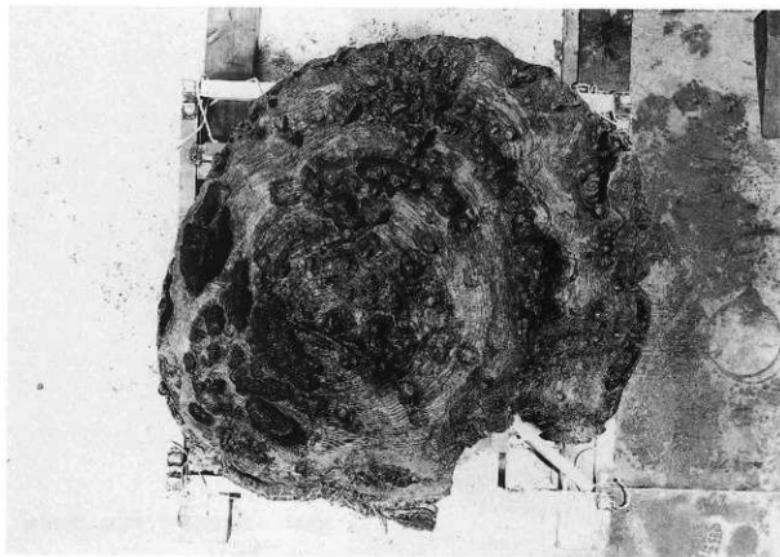


写真96 八足門前調査区 宇豆柱 北東柱材（上面）



写真97 八足門前調査区 宇豆柱 北東柱材（下面）



写真98 八足門前調査区 宇豆柱 北東柱材（底面加工痕）



写真99 八足門前調査区 宇豆柱 北西柱材  
(側面1)



写真100 八足門前調査区 宇豆柱 北西柱材  
(側面2)

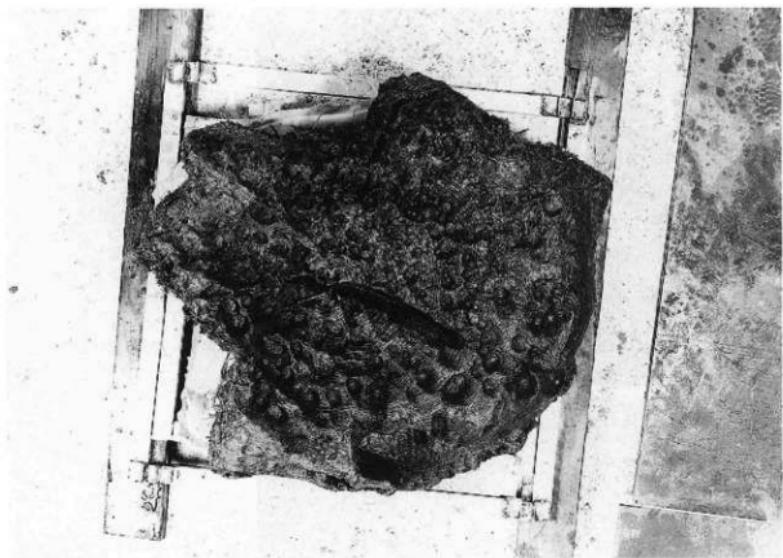


写真101 八足門前調査区 宇豆柱 北西柱材（上面）

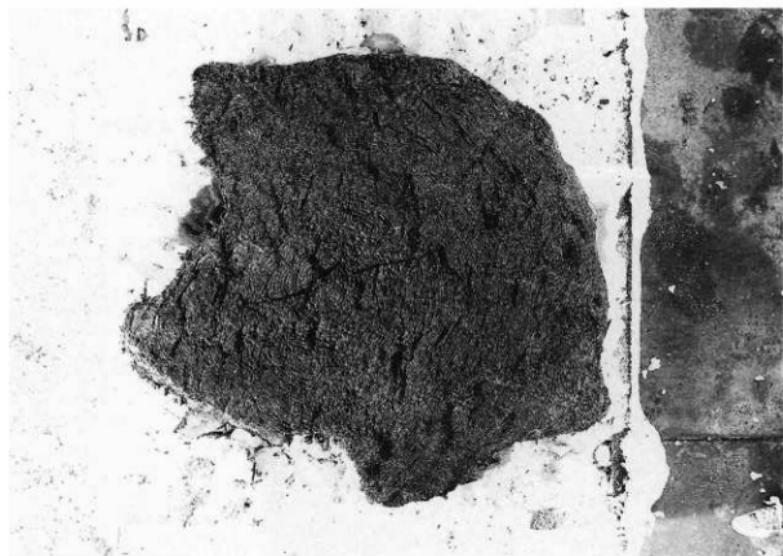


写真102 八足門前調査区 宇豆柱 北西柱材（底面）



（東側　えつり穴）



（西側　えつり穴）



（底面　加工痕）

写真103 八足門前調査区 宇豆柱 北西柱材（加工痕）

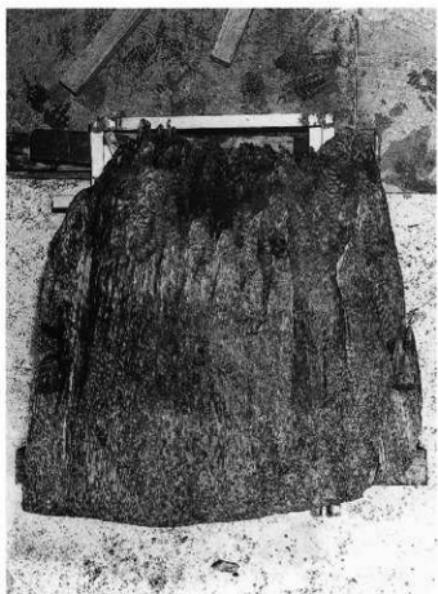


写真104 八足門前調査区 宇豆柱 南柱材  
(側面1)



写真105 八足門前調査区 宇豆柱 南柱材  
(側面2)



写真106 八足門前調査区 宇豆柱 南柱材（側面・東方向）



写真107 八足門前調査区 宇豆柱 南柱材（側面・西方向）



写真108 八足門前調査区 宇豆柱 南柱材（上面）



写真109 八足門前調査区 宇豆柱 南柱材（底面）